明治実業家列伝⑦

菅克復

仙台市博物館 市史編さん室長　菅野 正道

電灯会社設立の気運

明治二十一（一八八八）年二月、現在の西公園の場所にあった挹翠館（ゆうすいかん）に仙台の経済人たちが七十人以上も集まりました。目的は、仙台に電気の明かりをともそう、ということ。

挹翠館に仙台の経済人たちが集まった二カ月前、仙台では鉄道が開通し、近代化は一挙に足を早めようとしていました。それまでの蝋燭（ろうそく）や行灯（あんどん）とは比べ物にならない電灯の明かるさに、次に来るべき近代化の目玉として、多くの人が期待を寄せたのです。集まった人々は、仙台で電気事業を起こすことに異議はなく、満場一致で電気事業を推進することを決し、代表者を東京に送って、先進地の状況を調査することになりました。

早速、五人の代表が東京に出かけ、電気会社の調査を行うと共に、仙台出身で日本銀行総裁になっていた富田鉄之助に会い、その助言を求めたのです。富田は電気事業には反対ではありませんでしたが、東京ですらまだ始まったばかりで、不測の事態が発生する可能性もあるので、もう少し様子を見た方が良い、と慎重な姿勢を見せました。上京した五人のうち四人は富田の助言に従い、しばらく模様見をすることにし、仙台に戻ったのです。

宮城紡績器械場の図　三居沢に設けられた宮城紡績会社の工場を描いたもの。左下に水路が描かれている

日本最初の水力発電

しかし、ただ一人、富田の助言に従わなかった人物がいました。仙台の三居沢にあった宮城紡績会社を経営していた菅克復（かんこふく）です。

菅は、せめて自分の経営する紡績会社の工場だけでも電灯をともそうと、東京に残り、必要な機材の入手に努め、何とか小型の水力発電機と電灯を購入することに成功しました。機械が仙台に到着したのは、明治二十一年六月二十八日。早速、菅は機械を紡績工場の中に取り付けたのです。

菅がこれほどまでに電灯に力を入れたのは、紡績工場の立地も影響していたのです。三居沢の紡績工場では、明治十六年に水力タービンを設置して四十馬力の動力を得て、紡績機械を動かしたという実績を持っていました。崖にトンネルを掘って、広瀬川から導水して水力タービンを動かしたのですが、この水力タービンに発電機を接続すれば電気を得られると菅は構想したのです。そして、菅の構想通りに発電機は電灯をともすことになります。これは、日本で最初の水力発電だったのです。

古武士のおもかげ

菅克復は、天保八（一八三七）年に一関・田村家の家臣の家に生まれました。幼少から頭角を現し、田村茂村（もちむら）が仙台藩十三代藩主慶邦の養子になると、茂村の側近に抜擢され、仙台藩士となりました。茂村は不幸にして藩主の地位に就くことなく早世しますが、菅はそのまま仙台藩士として残り、明治維新後は仙台藩や水沢県の重職に就いています。

明治六年に職を辞して仙台に戻った菅が目にしたのは、維新後に困窮した生活を余儀なくされた旧藩士たちでした。菅は、その救済を志し、新しい産業として成長しつつあった紡績に目をつけました。財産を処分して、自ら各地を視察し、機械を導入して自らの屋敷をつぶして明治七年に木綿地織の工場を完成させました。後に三居沢に移った工場は、士族の子女たちの働く場所となったのです。宮城郡長、県会議員、仙台市議会議長にも就任した菅ですが、彼が力を入れたのは一貫して紡績工場と電気事業でした。

このように、新しい産業に着目し、それを地域振興に役立てようという先進的な考えをもった菅克復でしたが、一方では紋付の羽織袴を身につけ、漢籍に詳しい古武士のような謹厳な人物だったと伝えられています。その古武士のような人が、日本最初の水力発電を構想したというのは実に意外なことに感じられます。

菅克復は、大正二（一九一三）年に七十七歳で亡くなりました。その二ヵ月前、菅が始めた電気事業は仙台市に譲渡されましたが、菅が始めた三居沢の水力発電は、今もなお仙台市民の生活を照らし続けているのです。

仙台市史

好評発売中　通史編6 近代1

明治時代の仙台　近代化とそのくらし

◆A5判　520頁　オールカラー　◆定価3000円（本体2858円）

お求め先　県内主要書店・仙台市博物館／㈱宮城県教科書供給所
TEL.022-235-7181　FAX.022-235-7183

お問い合わせ先　仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地　TEL.022-225-3074

明治時代以来、発電を続ける三居沢発電所